棲霞園の作成について

永 松 義 博*

A Study on the Designing of Seika-en

Yoshihiro NAGAMATSU

摘要：お花畑とよばれる棲霞園は、長崎県平戸藩主松浦氏の別邸庭園で第三十五代松浦熙公によって造られた。

園内には棲霞園十景をうたった碑が立っており、往時の庭園の様子がうかがわれる。花畑碑によると、文化7年(1810)、古木を起こし二十年の歳月を費やして完成したといわれる。

異国風花壇をあしらった独創的な設計である。

文献資料、絵図面、現地実測を手がかりとして、作庭について考察を行った。

1. はじめに

九州の西北端、西海国立公園の中心平戸は景勝の地であるばかりではなく、嘗ては西の都と謳われた西欧文化初導入の窓口であり、松浦党史八百年を物語る幾多史実の秘められた史都である。天然の良港平戸湾は、中世以来の海賊衆として朝鮮海峡から東シナ海までをその活躍園とした松浦党が近世の幕藩制社会の中で最後に本拠としたところである。松浦氏は在地領主から戦国大名となり近世大名となった。居付きの外様大名として、一度の移封にも遭わず廃藩に至るまで平戸松浦八百年の伝統を守り続け、明治維新を迎えた。松浦氏二十六代鎮信(法印)公は慶長四年(1599)に縄張りを行ない現在の平戸城のある場所に城を築いたが慶長十八年に焼失する。新城は山鹿流兵法によって、松浦党三十代棟(雄香)公の世、宝永元年(1704)に着工し、十五年の歳月を費やし享保三年(1718)平戸口にのぞむ平戸島北、亀岡に平戸城(亀岡城)を再築した。平戸瀬戸の急流を前に平戸港を擁した好地に聳える名城は西海屈指の偉観であり、幾多の歴史を物語る。

中国、ポルトガル、そしてオランダ文化の影響を色濃く残す平戸の高台に棲霞園といわれる藩主松浦氏の別荘庭園がある。俗に“お花畑”と呼ばれているこの庭園には棲霞園十勝碑が建てられ、園の景勝がしたためられている。本研究では、棲霞園の造営について、庭園史料、庭園実測、現地調査を行い作庭の経緯について明らかにしようとするものである。

2. 棲霞園について

(1) 棲霞園

棲霞園は第三十五代、松浦熙(観中公)によって造られた庭園である(図-1)(表-1)。

観中公は

清(静山)

公の第三子

で松浦史料

館所蔵の大

半は静山公

の蒐集によ

るものであ

る。随筆

『甲子夜話』

二百七十八

巻を著した

人物として名高いが、いわゆる大名の殻を破った傑出した藩主であった。観中公も文武に秀で、文に於いては詩歌を能くし、詩集二十四巻、亀岡随筆八十六巻を著し、又、書家としても名高い。観中公は乾齋とも号し、乾とは西北を言い、齋とは静かな書齋を言う。棲霞園の園亭一言葉亭を意味するのである。公は明治天皇の大伯父に当たり、学問は佐藤坦及び江都一斎先生に学び、長い師弟関係にあった。一斎は美濃国生まれで(1772-1859)文化二年、林家の塾長をしていたが後、昌平黉(江戸幕府の学問所、事実上の官立大学で旗本や大名の子弟を対象とする儒学を中心とした教育機関)の長老儒学者として上下の尊敬が厚かった。門人には安積良斎、佐久間象山らがいる。著書には言志四録、近思録、周易欄外書などがある。

棲霞園の由来は中国の南京の東北に摂山と言う有名な山があり、ここを棲霞園と言い、麓には官を辞した人達や文化人などが余生を楽しみ、風雅な生活を送った。霞を食し、雲に住むという処から棲霞の名が出来たといわれる。観中公はこれをふまえ棲霞園の名を付けられたと

図-1 第三十五代 松浦 熙

*南九州大学園芸学部造園学科

表-1 平戸藩主(三十四代~三十七代)

○三十四代	松浦 清(静山公)	1760~1841
○三十五代	松浦 熙 ^{ひろむ} (観中公, 乾斎公)	1791~1867
○三十六代	松浦 躍 ^{てらす} (諦集公)	1812~1858
○三十七代	松浦 詮 ^{あきら} (心月公)	1840~1906

写真-1 花畑碑

図-2 花畑碑

いうことになる。

(2) 花畑碑

園内には観中公の筆になる花畑碑が立っている。碑は天保四年(1833)に建てられたもので碑面に由来がしたためられている(図-2)(写真-1)。

碑文は次の通りである。

花畑碑

凡そ世の中の人、みのほどに従い芳草花木を栽て造化の功を楽しみ翫ばぬはあらじ、抑この地を当城の再築¹⁾の後御園有りしと言いつうれども、或は廃し、或は興して花畑という名は延享²⁾の初めの頃よりなん見えける。されば古きにならぬ茲に小園を営まんと文化七年³⁾古木を起し二十年を経て漸く園亭ともに成りぬ、かく設くるは美麗を好むにあらず、只政務の明に来往し春秋に言葉⁴⁾をつらねかつ遠近を眺望して心を慰るに足れりとするのみ

観中公書 詩・

* 註

a) 再築は雄香公による

宝永四年(1707)~享保三年(1718)…15年間

b) 延享元~4(1744~1747)

c) 文化七年(1810)

d) 園亭は言葉亭という

棲霞園が完成したのは文政十二年(1829)である。溯って亀岡城再築の享保三年(1718)以後には園があったと言いつえられていて花畑の呼び名は延享の初め頃(1745)からであつたらしい。観中公は二十歳にしてこの地に新しく庭園を設けるを試みて、文化七年(1810)から

古木を起こし、二十年を経て漸く、園亭が完成した。即ち文政十二年(1829)である。園を棲霞園、亭を言葉亭と称した。観中公が庭園を造つたのは只、政務の後に、ここに来て四季折々に詩や歌を詠んだり、景色を眺め、心を癒すのみと記されている。

(3) 棲霞園寿碑

棲霞園寿碑は弘化三年(1846)江都一斎先生選文、沢田哲の書による観中公顕彰の碑である。碑は庭園正面の池泉の後、小高い丘に約20cmの台座に加工された石囲いの中、高さ2mの安山岩の自然石に隷書の文字がしたためられ棲霞園十勝の一つに数えられている(図-3)。寿碑とは存命中に建てられる顕彰碑を言い三十六代諦乗公により父君の観中公が天保十二年(1841)病にて隠退された五年後の弘化三年(1846)に建てられたものである。

碑文は次の通りである。

棲霞園寿碑

平戸老候乾斎公寿碑記

昌平学教授 佐藤 坦選文

徳の高い為政者の政は、その功德の総てを民がうけますので、その結果民は為政者の長寿を祈り、あるいは存命中に神としてお祀りするのです。人には寿命がありますので、生存中にお墓を建て、これに顕彰文を記したりするのです。古来ままこういう事が御座いました。

さて、平戸老候乾斎公は父君静山公の遺訓をつがれ、篤学、修業、勤儉ということ、御自身率先してなさいました。その上、専ら力を民政に尽くされました。一藩をあげ、身分の高い武士も、低い武士も、学問と技芸を争って身につけました。こうして民は食足りその徳を謳歌したので御座いますし、武士は士気高揚して、義におもむき、藩の守となることを潔よしとしたので御座います。しかしながら、残念なことには、老候には持病があられ、隔年に参勤交代して將軍におめにかかるということが出来ませんでしたことは、どうしようもなかったことで御座います。

そこで老候は早くから藩主を隠退して、平戸の地で年老いた身を養うことを願っておられました。しかし隠退といつても、国の政においては、その総てを辞してしまつたのではなく、この点世間の隠棲して気儘な生活を送る隠遁者とは違つていたので御座います。よく祖先を祀り、神を敬い、その助けをうけ、祖先がお悦びになるようなことが少なくなつたのです。

藩主となられた頃は専ら世論にしたがつて政を行ひましたので晩年には人望があり、すぐれた評判をとられました。正に中国でいう東隅・桑榆(とうぐう・そうゆ)の言葉通りその初めと終わりとは互いに輝き映じあつていといえるので御座います。先頃、*公は寿碑を造つて棲霞園内に置くべく、その碑記を私に求められました。

写真-2 言葉亭と錦斎

図-3 棲霞園寿碑

思えば私と公とは古くからの師弟の關係にあります。公の立派な政は一つ一つ数えあげるとは出来ない程ですが、そのことは公の伝記の方に譲り、ここではその概略のみを記し、その最後の部分に徳をたたえる銘を記すに止めます。とは申しまして、その趣意は中国の故事にありますように、食足りその徳をたたえた鼓腹撃壤（こふくげきじょう）と等しいものなので御座います。銘文は次ぎの通りです。

大鳥が飛ぶと言う名のめでたい平戸の国よ、その平戸の風雅な棲霞の園よ、霞を食し、大鳥に乗るばかりの高尚の生活よ、仙人と等しい老公よ、しかし、士民はその徳を仰ぎ、口伝えに永く立派な政の輝かしいさを伝えるでしょう。どうして、私のつまらぬ言葉を必要としましょうか、その必要は御座いません。

弘化三年丙午の歳十二月

棲霞園寿碑の額は諦乗公の書になる

造園雑誌 56(5), 1993

図-4 棲霞園十勝碑

図-5 棲霞園絵図（文政七年）
（松浦史料博物館所蔵）

*公は諦乗公

(4) 棲霞園十勝碑

庭内の池の東側（左手）に霊杉嶂、寿碑邸、桜花塙、風錦坡、澄鑑池、緑茵庭、茂承原、菖猗林、梅柳砌、攪洋墩の十景を織り込んだ棲霞園十勝碑が建てられている。園の十の景勝がしたためられており、往時の様子をうかがうことができる（図-4）。碑は安政六年（1859）に建てられたものである。

碑文は次の通りである。

棲霞園十勝

霊杉嶂^{ニキ}：園内の社の境内には杉が茂って、険しい峰が屏風^{サンロ}のようである。

寿碑邸^{ニキ}：乾斎老公（観中）公の顕彰碑、江都一斎先生が文章を選び、沢田哲の書で正面の土地の高い所に建てられた。園中の総べてのものがここに帰す。

桜花塙^{ニキ}：山の麓には見渡すかぎり、桜の太木が植えてある。そのそばに池がある。花が咲くときはまるで白雲がたなびいているかのように美しい。花盛りは花の土手のように見える。

風錦坡^{ニキ}：楓の林が東北の坂上にあり、桜の咲く塙と互い

図-6 棲霞園絵図(元治元年)
(松浦史料博物館所蔵)

図-7 棲霞園下図

図-8 澄鑑池絵図

写真-3 澄鑑池現況

に接している。紅葉の時節には遠く近くに照り映える。まこと紅葉の坂である。

澄鑑池：池の底には、汚れを防ぐため板石を敷きつめ、
そのために池水清く、鏡の様である。

緑茵庭：園の中央には一つの広い庭があり、芝生が緑の
麻の茵のようである。

茂承原：北側には老松一株と数十株の若松が茂って平原
の様である。

葉猗林：池の余水が庭を巡る溝に流れ出て、その末は竹
藪に注ぎ竹は緑に茂っている。

梅柳砌：家屋のあいだに梅柳各一株を植え、二つの池を
穿って水石は麗しく、綿を飛ばす柳は我国では
珍しい種である。

攬洋境：北隅に砲台を兼ねた台地を築き、壮観な玄界灘
を一望のもとに眺めることができる。

以上は、十勝の大略であるが社は跡のみにて、霊杉嶂の杉は既に一本もなく茂承原の松と梅柳砌の柳もない。古梅の太枝は枯れ落ち、かろうじて根元の幹から分かれ出た古枝にそれぞれ紅梅と白梅の遅咲きの香り高い花が咲く。この梅の木は『梅柳砌』に『屋宇重構之間……』とある梅である。

(5) 言葉亭

亭は言葉亭(げんようてい)と名づけられ三畳の茶室

二畳の間が三つ、合計九畳から成り立ち詩歌や茶の湯が楽しまれた(写真-2)。その位置は昔のままであるが基礎と瓦葺き屋根のみを残して外廊、内容ともに昭和年間に改造された。言葉亭額の裏面には、園亭が文政十二年(1829)の完成であることを示す文字が刻まれている。

(6) 棲霞園絵図

現在、松浦家に保存されている四枚の庭園絵図面の内、

図-9 棲霞園庭園実測図（永松他実測1990. 8）

特に美しい色彩の絵図面が二枚ある。文政七年（1824）に作成されたもの（図-5）と元治元年（1864）に作成されたもの（図-6）である。文政七年の絵図面によると家屋は言葉亭と背後にある小屋のみであり、元治元年、即ち四十年後の絵図面では庭園の西側の大部分に建物が広く二百坪ばかり建てられている。主たる座敷は八畳間の『錦斎』であるが言葉亭に接した御待合とその後の錦

斎の間は弘化四年（1847）に建てられていると想像される。その理由は御待合の屋根の修理の際、一枚の瓦の裏面に『弘化四年五月二日云々』の落書があるのが発見されていること。又、錦斎の連棚の袋戸に描かれた『鶴の群像画』の署名に、『弘化四年十月』とあることなどから言葉亭ができた十八年後に建てられたことがわかる。

さらに、昭和年間に一部改築の際、建物が何度かに亘っ

て増築されたのではないかとの知見が得られた。

棲霞園十勝碑は安政六年に建てられているが、この五年後に多くの家屋が増築されていることがわかる。ということは、棲霞園の完成後、数度に亘って家屋が増改築され庭も池も改造されたことになる。十勝碑にも記されているが庭園の右手の長い石段を昇ると南の門に出る。これを『さくらご門』と呼び、東南の門を『もみじご門』という。門を出ると昔は杉林があって右手は馬場であったらしい。現在はグラウンドと駐車場になっている。その杉林を通して昇っていくと亀岡城『北虎口門』俗名『狸櫓』に通じるのである。お客用碗には桜と楓の金蒔絵が施してあったと末裔の松浦規氏は話されている。

思うにこの庭園は池と芝生を中心として、杉、松、梅、楓及び竹の群落に、異国風花壇をあしらった独創的な設計である。棲霞園の花壇ほど大規模な整形園は日本庭園の歴史には見られず、平戸が古くからヨーロッパ文化を取り入れていたことを裏付けている。又何時入れたものか分からないが変形の朝鮮灯籠が十数基据えてある。文政七年の絵図では池は中央の池泉（澄鑑池）のみであるが元治元年の絵図をみると池泉は縮小され中島は沢渡りとなり、花壇は消え新しく『梅柳砌』跡に池が設けられている。そしてこの二つの池は当時併米田として用いられていたということである。居城廃止、転居のため屋舎が増築され庭園は大改造されたものと思われる。図-7は棲霞園絵図（元治元年）の下書きである。一坪（1.8×1.8m）単位の細かいメッシュで区画され緻密に描かれていることがわかる。図-8は澄鑑池部分の絵図であり、写真-3は澄鑑池の現況、図-9は棲霞園庭園の実測図である。絵図から判断できるが澄鑑池は正確に描かれ実測図と一致し作庭当初からのものであることがわかる。つまり原型がよく保存されているということである。

3. おわりに

棲霞園作庭の経緯についてまとめてみると次のようになる。

- ①亀岡城地内の園『お花畑』と称される 延享二年（1745）
- ②観中公当主となる 文化三年（1806）
- ③棲霞園起工（観中公二十才） 文化七年（1810）

- ④棲霞園絵図完成 文政七年（1824）
- ⑤棲霞園完成 文政十二年（1829）
- ⑥言葉亭完成 文政十二年（1829）
- ⑦花畑碑建立 天保四年（1833）
- ⑧観中公五十才にて隠居 天保十二年（1841）

諦乗公藩主となる

静山公逝去

- ⑨棲霞園寿碑建立 弘化三年（1846）
- ⑩錦斎完成 弘化四年（1847）
- ⑪諦乗公逝去 安政五年（1858）

心月公藩主となる（十八才）

- ⑫棲霞園十勝碑建立 安政六年（1859）
- ⑬棲霞園絵図面完成 元治元年（1864）

現在の棲霞園は池の湧き水がやや衰え、水量が減じてはいるものの冬期にも絶えることなく池底の敷石は昔と変りない。この地は水仙が良く育ち、早咲きで香り高い花が歳の暮れから咲き始める。小鳥が戯れ餌を啄み、山桜、染井吉野桜の花が三月中旬からひと月間次々と開花し、芝生の緑の新芽がのびだすと同時に楓も一斉に芽ぶき始める。さつき、みつばつつじ、平戸つつじの開花の頃は楓の新緑が他の樹木の緑と共に庭一面に照り映えて実に美しい。つつじの花が終わりに近づく頃は、石組や余水の流れる処にはほころび始めたかきつばたの蕾が清楚な姿で最も美しい時期である。続いて白、紫、絞りなどの花菖蒲が勢い良くのび始める。はまゆりに白い花が付く頃は夏である。やがて楓の緑が愈々色濃くなり初秋を思わせる頃となる。池淵の樹木の下に自生しているつわ蒨に黄色の花が一面に咲き楓が徐々に紅葉を始めると秋も深まっていく。これが四季折々の棲霞園の情景である。

（謝辞）現地調査、史料収集に協力頂いた松浦規氏、庭園実測に協力頂いた古賀元浩、案納泰広、上野慎也、丸山浩明の諸氏に心から深謝致します。

参考文献

- 1）財団法人松浦史料博物館（1986）：史都平戸一年表と史談
- 2）平戸市長室（1967）：平戸市史

Summary : Seika-en, which is called "The Flower Field", was made as a villa garden of Matsuura family, the feudal lord of Hirado (now in Nagasaki prefecture), by Matsuura 35th. In the garden, a monument revealing 10 most impressive scenes of Seika-en shows us the past sight of the garden. According to the monument, the garden was completed in 1810 after removing old trees for 20 years. The designing of the garden is original one, featuring European style flower bed. I studied on the designing of Seika-en through historical materials, pictorial drawings, and field survey.